



北海道ブロッククラブネットワークアクション 2017 開催報告

日 時： [1 日目] 平成 29 年 10 月 28 日 (土) 13:00 ～ 17:30

[2 日目] 平成 29 年 10 月 29 日 (日) 9:00 ～ 12:30

会 場：北海道立総合体育センター「きたえーる」

内 容：テーマ：『地域スポーツの在り方を考える』

[1 日目]

1. 共通プログラム「地域スポーツクラブと障がい者スポーツ団体の連携」

2. パネルディスカッション

「当事者目線で考えるスポーツ少年団と総合型クラブの未来」

[2 日目]

1. パネルディスカッション

「総合型クラブと学校運動部活動の連携の在り方を探る」

2. 事例発表「私のクラブ紹介」

参加者：72名

【概要】

第2期スポーツ基本計画の具現化を目指し、主要テーマを「地域スポーツの在り方を考える」としました。2日間の内容として、総合型クラブが地域の課題解決に役立つ存在になるため、今日的課題である「スポーツ少年団や学校運動部活動との連携」に焦点を当て、現場目線のディスカッションを通し、クラブの存在意義を再考する機会になりました。

昨年に引き続いて行われた「障がい者スポーツ」に関する共通プログラムについては、知的障がい者を対象にしたスポーツプログラムの設定を考える機会になり、参加者は、知的障がい者への接し方や適応する種目などに理解を深め、障がい者スポーツ指導者資格の取得に興味を抱いていました。

スポーツ少年団と総合型クラブの連携について、参加者はその意義を感じ取っていましたが「目先の課題として」の関心は薄く、会場内に「率先して連携したい」という雰囲気はありませんでした。しかしながら、連携のカギは「メリットの共有」で、「相互理解が課題解決の第一歩」であるとの認識が広がったと考えます。

学校運動部活動との連携は、少子化で部活の存続が困難になることや顧問の負担が大きいことから民間指導者が関わることへの理解は深まりましたが、学校側のニーズが定かでなく、指導者確保や指導者の身分保障にも課題があることから、理想と現実の議論が交錯したように感じました。

【内容】

[1日目]

共通プログラム「地域スポーツクラブと障がい者スポーツ団体の連携」

障がい者スポーツの機運が高まり、理解も進んでおりますが、総合型クラブのプログラムに取り入れるには疑問や不安があり、踏み切れていないクラブも多いことから、昨年につき、共通プログラムとして「障がい者スポーツ」を取り上げました。

具体的なテーマとして、知的障がい者に的を絞り、関連知識を深め、関係団体との連携について学ぶ機会とし、講師には、公益財団法人北海道障がい者スポーツ協会の小林和史氏、北海道立雨竜高等養護学校の今野征大氏を招きました。

- ・ 小林氏は①北海道障がい者スポーツ協会が関わる大会の概要②障がい者スポーツ教室の実態③大会派遣の状況について説明し、障がい者スポーツ普及の手立てとして、参加者に対し「障がい者スポーツ指導者の資格取得にチャレンジしてほしい。3日間の講習で初級資格を取り、中級、上級を目指してほしい。」と呼びかけました。また、知的障がい者に対するスポーツ指導時の留意点についても説明しました。



小林 和史 氏

- ・ 続いて「知的障がい者が総合型クラブのスポーツ教室に参加したい」と問い合わせがあったことを想定したワークショップを行い、参加者に対し知的障がい者との接し方について説明しました。今野氏は「適応する種目を選ぶには、社会性が身についているかどうか見極めることが大切」「幼少期や学生は楽しめるスポーツ、社会人はサッカーなど集団スポーツが適している」「障がい者には笑顔で接し、話をよく聞くこと」など現場目線のポイントを伝えました。



今野 征大 氏

【まとめ】

- ・ 知的障がい者にターゲットを絞った説明とアドバイスは、クラブの周囲に知的障がい者の支援施設が多いこともあり、身近な話題として聞くことができました。
- ・ 障がい者との接し方に具体的なアドバイスが得られ有益でした。
- ・ 障がい者スポーツ指導者の資格取得への気運が高まったように感じました。

パネルディスカッション「当事者目線で考えるスポーツ少年団と総合型クラブの未来」

パネリストとして、道内のスポーツ少年団（以下、「少年団」という）の変遷に詳しい公益財団法人北海道体育協会事務局長の山口淳一氏、小学生の時から団員、リーダー、指導者として40年以上にわたり少年団に関わっている伊達市スポーツ少年団副本部長の柳谷賢二氏、自身のクラブが少年団本部の事務局を担っている NPO 法人幕別札内スポーツクラブの小田新紀氏、クラブの中に3つの少年団を抱える一般社団法人わくわくピース総合型クラブの久保田智氏、に登壇いただき、北海道ブロック実行委員長の伊端 隆康氏のコーディネートのもと、パネルディスカッションを行いました。主な発言は下記の通りです。

＜北海道内の少年団の現状と課題＞

- ・ 団員の減少に歯止めがかかっていない。
- ・ スポーツの得意な子どもの受け皿になり、運動の苦手な子どもの受け皿とは言い難い傾向。目的が「勝利至上主義」になり、本来の「健全育成」が忘れられている。
- ・ 束ねる組織の機能が低下し、少年団本部事務局の事務量が多く交流機会が減っている。
- ・ 指導者が高齢化し、なり手が不足している。
- ・ 同じ地域の少年団間で理念が違い「想いの共有」が困難になっている。



左から伊端氏、山口氏、柳谷氏、小田氏、久保田氏

＜課題解決の方策やアイデア＞

- ・ 競技にこだわらない活動、遊び等を通じて楽しむ体験ができればいい。
- ・ 複数種目を体験でき、勝つことにこだわらない少年団が本来望ましい。
- ・ 事務局機能を総合型クラブが引き受け、少年団の負担を軽減する。
- ・ 少年団と総合型クラブ（または体協）で指導者の融通を図る。
- ・ 中学生、高校生のリーダーを増やす（いずれドイツへの派遣を通じて後継者の養成をする）



＜連携具現化の方向性＞

- ・ 少年団、総合型クラブそれぞれに互いの活動を理解し、できることから一緒に取り組む。
- ・ 相互補完で相互メリットを追求する（事務局機能、指導者、会員募集、広報活動など）
- ・ 連携の成功事例をまとめ、取り組む意欲のある地域に伝え、試行してもらう。
- ・ 両者が歩み寄るための「つなぎ仲介役」（キーパーソン）を探す。

＜まとめ＞

- ・ パネルディスカッションの合間に、参加者対象のミニアンケートを行いました。「少年団と連携してみたい」「連携を検討したい」と答えたクラブは全体の1割ほどで、連携のハードルはかなり高いとの印象でした。
- ・ 少年団の事務局の多くは教育委員会にあり、連携には行政支援が不可欠と感じました。
- ・ 少年団、総合型クラブそれぞれにメリットが感じられる「連携モデル」を示すことが重要で、わかりやすいPRが連携具現化の第一歩と感じました。

パネルディスカッション「総合型クラブと学校運動部活動の連携の在り方を探る」

学校運動部活動は、少子化で部員が減り、それに伴い休廃部が増え、指導者が不足する中で顧問になる教員の多忙化に拍車がかかるなど、学校だけでは解決できない問題を抱えている現状です。

課題解決の議論は多方面でなされていますが、解決策の一つに外部指導者の派遣があり、指導者の受け皿として総合型クラブの存在が注目されていることから、総合型クラブと運動部活動の連携の在り方考える機会としてパネルディスカッションを企画しました。

パネリストとして、札幌市中学校体育連盟事務局長の塚本慈彦氏、中学校の運動部活動を支援している大分県のNPO法人七瀬の里Nクラブゼネラルマネージャーの森慎一郎氏、道内の中学校で外部指導者として活動している女子バレーボール元全日本代表の成田郁久美氏に登壇いただき、北海道ブロック実行副委員長の山本理人氏のコーディネートのもと、パネルディスカッションを行いました。主な発言は下記の通りです。

<学校運動部活動の現状と課題>

- ・ 少子化で部活がなくなる危機感がある。
- ・ 野球、サッカー、バレーボールなど団体種目の部活動が困難になり、近隣校で合同チームを作る例が増えている。
- ・ 子どもたちが好きな種目を選択できない。
- ・ 専門外の指導者が顧問に就くケースが多くあり、外部指導者は「危機管理面」で不安を感じている。
- ・ 外部指導者としてふさわしい人材を探しづらい（なかなか見つからない）。
- ・ 学校側が本当に外部指導者を求めているのか、よく分からない。
- ・ いわゆるブラック部活が問題視されている。



左から山本氏、塚本氏、森氏、成田氏

<課題解決の方策など>

- ・ 指導者を探す窓口として総合型クラブの存在は有益である。
- ・ 信頼できる外部指導者の供給元として総合型クラブが期待される。
- ・ 学校運動部活動の課題は「地域課題」でもあり行政支援は不可欠である。
- ・ 特に教育行政には、財政面、施設の優先使用、指導者の身分保障などが期待される。
- ・ 中学校の敷地に総合型クラブの拠点を作り、学校と一緒に取り組む。



<まとめ>

- ・ 会場の雰囲気から、学校運動部活動との連携の課題は多く、国が大きな方針を決めることが重要との認識が広がりました。
- ・ 学校運動部活動と総合型クラブの連携は、地域事情に応じた柔軟な対応が大事だと感じました。
- ・ 外部指導者が必要か否か学校側のニーズを探り、求めがあるなら、それに対応できる組織（総合型クラブなど）を探して対応することが現実であるという印象でした。

事例発表「私のクラブ紹介」

NPO法人きたひろちよいスポ倶楽部の鈴木ゆかり氏、NPO法人羅臼スポーツクラブらいずの石崎佳典氏、NPO法人びふかスポーツクラブの戸谷岳人氏に自身のクラブ紹介を行っていただきました。

<NPO法人きたひろちよいスポ倶楽部・鈴木ゆかり氏>

- ・ 住民の健康、子どもの健やかな成長、地域の連帯などを目的に設立。町内会館を拠点とする。
- ・ 設立当初は北広島市内の大曲地区で活動していたが、その範囲を町全体に広げたことで「よりづかちよいスポ」から「きたひろちよいスポ」に改名。
- ・ トップアスリートの派遣団体と連携し学校運動部活動に指導者を派遣している。
- ・ ニュースポーツ「スポレック」の全道組織を束ね、普及に取り組んでいる。



左から鈴木氏、石崎氏、戸谷氏

<NPO法人羅臼スポーツクラブらいず・石崎佳典氏>

- ・ 体協やスポーツ推進員を中心に設立準備をしていたが軌道に乗らず、以前青年活動などで活発に活動していた町民に声をかけ、有志の運営委員会を組織したことでクラブが立ち上がる。
- ・ 設立当初から事業開催型のクラブとして活動を続けている。各種教室のほか、サークル活動、アウトドアプログラム、コーディネーション（COT）プログラムなど多彩である。
- ・ 馴染みの事業の他、町から介護予防事業や学校体育におけるCOT指導なども受託している。
- ・ 設立10年を迎え、体制を含めて過渡期を迎えるため、今後も「羅臼にとってなくてはならないクラブ」を目指す。

<NPO法人びふかスポーツクラブ・戸谷岳人氏>

- ・ 子どもの体力低下という地域課題を解決する目的でクラブ設立した。
- ・ 解決方策として「歩く習慣」と「外で遊べる環境づくり」を目指し、そのフィールドを「地域の自然」の中に見出し、さまざまな運動教室を開催している。
- ・ 天塩川でのチョウザメ探索やサケの遡上観察を行い「歩く」「外で遊ぶ」ことが体験できる。自然環境を学ぶ場にもなっている。
- ・ 冬には手作りのスノーボード「雪板」の滑走体験で冒険心を養い、ふれあいを深めている。